

岐阜県中津川市加子母における歌舞伎保存会の運営システムに関する研究

指導教員 藤岡 伸子 教授

藏野 洋美

1. 研究の背景と目的

岐阜県東濃地方は、農村舞台という文化資源が多く残る地域である。この地域では、高度経済成長期が終わる1970年代から、毎年それぞれの舞台で地域住民による歌舞伎が行われている。

中でも中津川市加子母の劇場型農村舞台「明治座」は、1894年の建設から今日に至るまで、ほぼ創建当時の姿で残ってきた。さらに、他の舞台と違って常時開館されており、2015年の大改修では、住民の意向により屋根を創建当時の板葺きに復原された。それは、1973年から始まった加子母歌舞伎が毎年かかさず上演されており、住民たちが明治座へ強い関心を抱いているからであると推測される。

本研究では、加子母歌舞伎の運営システムを調査することによって、明治座が今日まで形を変えずに保存・活用されてきた理由を探る。そして、明治座と加子母歌舞伎を次の世代へ残していくための手がかりを確認することを目的とする。

2. 研究の対象と流れ

まず、文献調査と聞き取り調査によって、加子母歌舞伎の歴史と現況、そして保存会の運営方法を調べる。次に、歌舞伎関係者に対面聞き取り調査を行うことによって、参加者の意識を調べる。

3. 加子母歌舞伎の歴史と現況

調査を元に、「地芝居」と「農村舞台」の2軸を設けた加子母歌舞伎年表を作成した。(表1)

3.1 第一期：創始期（～1943年）

1) 地芝居の発生 全国的な地芝居の成立時期は、江戸中期の宝暦～天明（1751～1789年）ごろとされている¹。加子母地域においてもほぼ同時期に始まったと考えられる。

江戸時代に歌舞伎の上演が許可されていた場所は、基本的には江戸、京都、大阪の三都のみであった。一方で、加子母の属する美濃地方は尾張藩の直轄領であり、農村の撫民政策として地芝居の上演が容認されていた。幕府にとって重要な木材生産地であったため、特別に芝居が許容されていたのである²。

2) 舞台の変化 当初、村芝居は仮設舞台で行われていた。やがて、神社の境内に常設舞台を設けるようになった。加子母にも下半郷³に万賀の舞台があったが、1876年に火災で消失したため、その後、劇場型農村舞台「明治座」が1894年に建設された。万賀地区の共同財であり、当時製糸工場で働いてい

た村の娘たちが寄贈した「娘引幕」が現存している。

舞台開きは、1894年の12月10日から4日間にわたって買芝居で行われた。以降明治座は芝居小屋として盛況を博し、1932年には昭和最大規模の地芝居の祭典として、下郷神社の祭礼狂言が行われた。

表1 加子母歌舞伎年表

第一期：創始期（～1943年）		
地芝居	江戸	農村舞台
上呂村久津八幡宮立願書 (日本最古の地芝居の記録)	1615	
地芝居の発生	1621	【加子母】 尾張領となる
	1751	
	1789	
	1804	農村舞台の常設化
	1830	
	1876	万賀の舞台が火災により消失
大政奉還	1867	
	明治	
岐阜県で地芝居が禁止される	1872	
	1880	
日清戦争	1894	明治座建設、舞台開き
	1895	
東濃地方の村芝居上演のピーク	1887	
岐阜県の鑑札制度の実施	1902	
	大正	
	1914	第一次世界大戦
	1918	
	昭和	
下郷神社の祭礼狂言(地芝居)	1932	
	1937	日中戦争開始
第二期：停滞期（1944～1969年）		
	1944	明治座が軍需倉庫になる
	1945	
	1946	明治座保護会結成
	1947	
【加子母】 岐阜県恵那郡に編入	1947	
	1954	高度経済成長期開始（～1972年）
水無神社祭典の試奏の余興(地芝居)	1960	
テレビの普及により芝居が廃れる	1960後半	農村舞台の廃絶が相次ぐ
東濃歌舞伎保存会の発足	1965	
明治座で地芝居公演	1967	明治座があまり使われなくなる
第三期：再興期（1970～）		
	1970	全国の農村舞台の調査
	1972	明治座が岐阜県の 重要有形民俗文化財に指定
<歌舞伎保存会>		
加子母歌舞伎愛好会発足	1973(1)	
第1回公演(2日間)		
加子母歌舞伎保存会に改称	1974(2)	
NHK「新日本紀行」に取り上げられる		
岐阜日日賞教育文化賞を受賞	1975(3)	
岐阜県芸術文化顕彰を受賞	1978(6)	
子供歌舞伎開始		
加子母松原会の発足	1985(13)	
地域文化功労者表彰を受賞	1986(14)	
	平成	
公演が1日のみになる	1992(20)	
保存会の再編	1995(23)	
創作芝居「装束と盛造」の公演	1997(25)	加子母風起こし実行委員会発足
	1999(27)	
東濃歌舞伎揃い踏み公演 (ワエルカム21ぎふ)	2000(28)	
武蔵野美術大学が関わり始める	2002(30)	明治座の常時開館開始 明治座活用委員会発足
振付師が松本団女になる	2003(31)	
	2005(33)	【加子母】 中津川市と合併
NHK「新日本紀行ふたたび」に 取り上げられる	2008(36)	
岐阜自慢ジカブプロジェクト始動	2010(38)	
	2014(42)	明治座耐震改修検討委員会発足 明治座改修工事開始
明治座こけら落とし公演	2015(43)	明治座改修工事完了

3.2 第二期：停滞期（1944～1969年）

1) 第二次世界大戦前後 明治座は1944年から翌年まで軍需倉庫として使われた。その際に桁席が壊され、軍の撤退後も劇場として使えない状態になっていたため、下半郷の有志が寄付を募って修理した。そして、1956年に「明治座保護会」が結成された。

1948、1951年には明治座保護会が呼んだ松竹大歌舞伎の公演が行われた。また、1960年には水無神社祭典の試楽の余興で、地芝居の公演があった。

2) 高度経済成長期 戦争の終わりとともに地芝居も復活したが、高度経済成長期に入ると、人々の関心はテレビや映画などの娯楽へと移った。同時に農山村の過疎化も深刻になり、演者も観客も確保できない状況になったため、多くの地芝居が消滅した。

昭和40年代に入った加子母では、明治座がほとんど使われなくなった。1967年には明治座で地芝居復活公演が行われたが、それ以降は上演が途絶えることになる。

3.3 第三期：再興期（1970年～）

1) 加子母歌舞伎愛好会の成立 1970年から1973年にかけて、文化庁は明治座を文化財指定の候補に挙げ、調査を行った。明治座は国の指定は受けなかったが、代わりに1972年、岐阜県の重要有形民俗文化財に指定された。これを契機に1973年、「加子母歌舞伎愛好会」（翌年「加子母歌舞伎保存会」に改称）が結成された。加子母は県内でも数少ない、農村舞台と歌舞伎保存会が揃って存在する地域となった。

2) 歌舞伎保存会の歩み 以後、加子母歌舞伎は毎年公演を続けてきた。そして、1975年には岐阜県日賞教育文化賞を、1978年には岐阜県芸術文化顕彰を、1986年には文化庁の地域文化功労者賞を受賞している。1980年代、観客数は一時的に減ったが、小中学校生やIターン者などの新たな演者を取り入れ、さらに保存会を再組織することによって公演が続いてきた。

2015年には、約40年ぶりに明治座が大規模に改修され、こけら落としとして第43回公演を迎えた。

4. 歌舞伎保存会の運営システム

4.1 歌舞伎保存会の組織

1) 1995年以前 結成当初の保存会には役者のみが所属しており、収入面は敬老会公演での御祝儀に頼る部分が大きかった。

2) 1995～2010年 1995年、歌舞伎保存会が再編成され、役者の他に協力会員を募ることになった。会員は一般と法人に分かれ、一般会員は一口500円の寄付を行う。加子母の全戸に協力を呼びかけ、区長を通じて会費の徴収を依頼する。原則として会員期間は1年とする。この当時は役者部会など4つの部会があった。（図1）

3) 2011年以降 2011年に歌舞伎保存会規約が改正され、部会がなくなった。

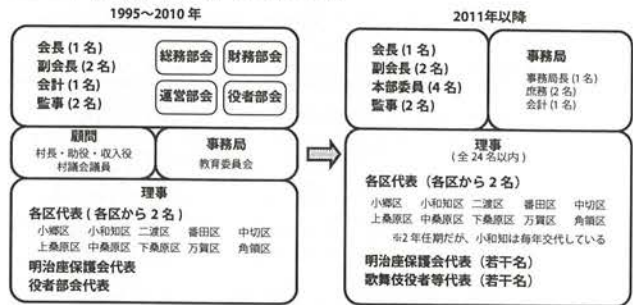


図1 歌舞伎保存会の組織構成の変遷

4.2 保存会の関連組織

1) 団升一門 振付師を中心とする地芝居団体である。主に東濃地方で活動し、着付け師・顔師・床山・太夫などを抱える。

6代目松本団升(1922～2007)は、1946年から山岡町に住み、振付を始めた。1959年、伊勢湾台風によって地芝居公演がほぼ全て開催できなくなった時、他の振付師は仕事をやめたが、団升は後述する松扇会の活動で生活を支えた。そして教え子に歌舞伎の振り付けをすることで、地芝居の消滅を回避し、復活を実現してきた。1987年には、地芝居において文部大臣から地域文化功労者賞を受賞した。

加子母歌舞伎には、1973年から2002年まで振付師として関わり、2003年から、娘の2代目松本団女が跡を継いでいる。

2) 松扇会 日本舞踊団升流の会である。地芝居衰退期である1959年に発足し、1985年に加子母支部が設立された。他は恵那市上矢作町、明智町、山岡町、中津川市阿木、苗木、坂下に支部がある。

加子母歌舞伎公演には第12回(1984年)から舞踊で参加する。師匠が同じであるため、松扇会のメンバーが歌舞伎に出演することも多い。

3) 安藤衣裳部 岐阜県瑞浪市で古くから続いていた地芝居用の衣裳屋であった。しかし、1972年に区画整理のため立ち退きを余儀なくされ、衣裳の保管場所がなくなったため、全ての衣裳は美濃歌舞伎博物館⁴で管理が行われるようになった。加子母では第2回公演(1974年)まで衣裳を借りていた。

4) 日吉ハイランド衣裳部 美濃歌舞伎博物館が所有する江戸時代からの歌舞伎衣装4500点、かつらなど350点、小道具など300点を貸し出している。また、2006年には各務原の衣裳屋⁵からも衣裳を引き取り、管理している。

加子母歌舞伎では、第3回公演(1975年)から第39回公演(2011年)まで衣裳を借りていた。

5) 松本衣裳 団升一門が所有する衣裳(新規に作製したものも含む)を管理する団体である。加子母歌舞伎では、第40回公演(2012年)から現在に至るまで、ここから衣裳やかつらを借りている。

6) 武蔵野美術大学 空間演出デザイン学科の川口直次教授のゼミ生が、第30回公演(2002年)から大道具や照明係として協力している。現在はOB・OGが中心となって学生を集め、例年一週間ほど加子母に滞在し、大道具を製作する。本番では道具の組立・解体、幕引きも担当する。

4.3 加子母歌舞伎の運営方法

調査によって明らかになった毎年の公演スケジュールを表2に、歌舞伎保存会と内部・外部組織との関わりを図2に示す。

表2 加子母歌舞伎の公演スケジュール

時期	出来事	説明
12月もしくは2月ごろ	挨拶	振付師に一年のお礼と、「来年もよろしくお願ひします」という挨拶をする
3~6月	台本選定	振付師にその年参加するメンバーを伝え、台本を決定する
6月末~8月	練習	振付師を呼ぶ練習が約15回、自主練習が10回程度である
本番前日	三味合わせ	リハーサルとして、この日に初めて三味線と合わせて練習を行う
9月第1日曜日	公演	通常はこの日に公演をする

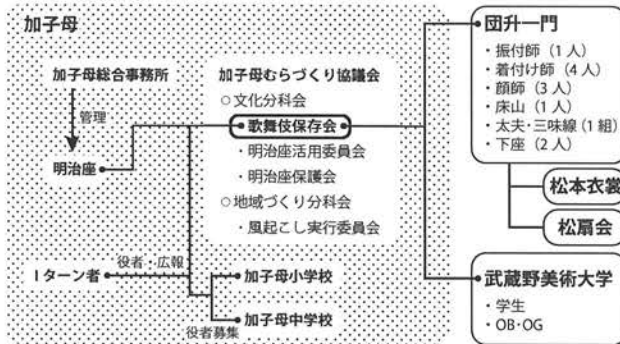


図2 加子母歌舞伎関連組織

5. 歌舞伎関係者の意識調査

5.1 方法 加子母歌舞伎が40年以上続いてきた理由と、人々が歌舞伎に関わる動機、そして歌舞伎と明治座との関連性を明らかにするため、聞き取り調査を行った。調査期間は2015年10月16日~12月18日、回答者は加子母歌舞伎に関係する人物、計15名である。調査表を被験者に配布し、それに基づいて対話形式による聞き取り調査を行った。

5.2 項目 (1) 基本属性、(2) 歌舞伎に関する質問、(3) 明治座に関する質問、の3カテゴリ計12項目を質問した。表3に示す(1)基本属性、(2)の⑤~⑥までは全員に、そして⑦は調査時に歌舞伎との関わりを休止していた人物に対して尋ねた。⑧~⑪は④において「歌舞伎役者」と回答した人物のみを対象とし、(3)は再び全員に質問した。

5.3 結果・考察

1) 基本属性 結果を表4に示す。加子母外の出身者は県の移住事業⁶によって村に来たIターン者と、外部組織に所属する人物である。

2) 歌舞伎に関する質問

⑤いつから関わっているのか 集計結果を加子母歌

表3 調査項目

カテゴリ	No.	質問項目
(1) 基本属性	①	性別
	②	年齢
	③	出生地
	④	歌舞伎との関わり方
(2) 歌舞伎に関する質問 ※⑧~⑪は歌舞伎役者のみに質問	⑤	いつから関わっているのか
	⑥	関わるきっかけ(複数回答)
	⑦	休止理由(引退・休止中の人物のみ)
	⑧	何故歌舞伎を続けてきたのか
	⑨	歌舞伎の魅力
	⑩	演じた時に手応えがあった役と、その理由
	⑪	歌舞伎と生活の関わり
(3) 明治座に関する質問	⑫	明治座と他の舞台の違い(複数回答)

表4 基本属性		表5 ⑤いつから関わっているのか	
性別	回答数	分類	回答数
①性別	男	第1回~第10回公演(1973~1982年)	6
	女	第11回~第20回公演(1983~1992年)	2
②年齢	20代	第21回~第30回公演(1993~2002年)	3
	30代	第31回公演~(2003年~)	4
	40代		
	50代		

表6 ⑥関わるきっかけ(複数回答)		表7 ⑦休止理由	
分類	回答数	分類	回答数
芝居が好きだったから	3	年齢的理由による引退	3
誰かに誘われたから	6	家庭の事情(出産など)	1
(内訳) 役者の友人・知人	4		
役場職員	2		
家族が熱心だったから	3		
松扇会	1		
記念公演	2		
武蔵野美術大学	2		

表8 ⑧何故歌舞伎を続けてきたのか		表9 ⑨、⑩、⑪の回答例	
分類	回答数	⑨歌舞伎の魅力とは	⑩手応えがあった役とその理由
積極的	3	芝居が好きだから	理由) うまく出来た、評価が高かった
参加すると習いになることがあったから	1		難しかった、うまく演じられず残念だった
消極的	3	自然に・なんとなく	仕事や家事のカーブや家族がする練習時間外に台詞を覚えるための自主練習をする
やめづらい	3		何度か演じた役だった

表10 ⑫明治座と他の舞台の違い(複数回答)	
分類	回答数
演じることにしては変わらない	2
明治座はホームグラウンド	3
先人たちが守ってきた場所	3
役者と観客の一体感を味わえる	3
空間やしつらえがいい	2
明治座は芝居小屋として建てられたので、歌舞伎が必要である	4

表9 ⑨、⑩、⑪の回答例	
分類	回答数
積極的	3
参加すると習いになることがあったから	1
消極的	3
やめづらい	3

表10 ⑫明治座と他の舞台の違い(複数回答)	
分類	回答数
演じることにしては変わらない	2
明治座はホームグラウンド	3
先人たちが守ってきた場所	3
役者と観客の一体感を味わえる	3
空間やしつらえがいい	2
明治座は芝居小屋として建てられたので、歌舞伎が必要である	4

舞伎の開催時期によって4つに分類した。(表5)

第1回~第10回公演から参加し、現在まで20回以上歌舞伎に出演している人物も多かった。

⑥関わるきっかけ 複数回答として集計した。(表6)「芝居が好きだったから」という積極的理由が見られた。回答者は、歌舞伎復活以前から青年団演劇や居住地区の祭りの芝居に出演しており、自然に歌舞伎へ情熱が移った場合が多かった。この3名は、いずれも初期から参加し、以降30回近く歌舞伎に出演している。

最も回答が多かったきっかけは「誰かに誘われたから」であった。役者の友人から誘われることが多

く、1ターン者の場合は当時の村役場の職員から誘われている。さらに、2名は家族が熱心に歌舞伎に取り組んでいたため、自然に関わりはじめた。

また、1名が松扇会入会を、2名が記念公演の際の特別出演をきっかけとしていた。また、武蔵野美術大学のゼミの授業で加子母に関わりはじめた人物は2名だった。

⑦**休止理由** 歌舞伎をやめたり、休止したりしている人物が4名いたため、その理由を尋ねた。(表7) 年齢的な理由が多かった。また、仕事や生活が忙しく一時的に休止していた人物が、歌舞伎に復帰するケースも見受けられた。

⑧**何故歌舞伎を続けてきたのか** 表8に結果を示す。積極的理由として、「芝居が好きだから」「参加すると得になることがあったから」が挙げられた。

一方で、消極的理由として「責任を感じるため、やめづらい」「自然に、なんとなく続けている」という意見も多かった。一度歌舞伎に参加すると、断らないかぎり翌年も配役されるシステムであるため、「自然に、なんとなく」歌舞伎を続けたが、徐々に芝居に熱が入る場合もあった。

⑨**歌舞伎の魅力** 表9に挙げたように、役者たちは、他の娯楽では体験できないことに魅力を感じていることが分かった。

⑩**演じた時に手応えがあった役と、その理由** ⑨と関連して、役者の歌舞伎への思いを把握するために質問した。それぞれの役を回答した理由を表9に示す。

振付師は役者の個性を考えて配役しており、女形や三枚目の役など、人によってよく割り振られる役割があるため、何度も同じ役を演じることがある。よって、一つの役が強く印象に残り、また「前よりもうまく演じなければならぬ」という気持ちが「難しかった」という回答につながっている。

⑪**歌舞伎と生活との関わり** 歌舞伎は生活の合間に練習するものである。よって、仕事との両立や、練習外での歌舞伎との関わりについて質問した。

仕事や家事は、仲間と家族の協力によって成り立っているという意見が多かった。また、ベテランの役者からは、引退後も家に集まり、歌舞伎の思い出話をしているという発言もあった。

3) 明治座に関する質問

⑫**明治座と他の舞台の違い** 昭和や平成に作られた新しいホールと、築120年以上の農村舞台明治座との違いを探るため、質問した。結果は複数回答として集計した。(表10)

「芝居小屋として建てられた明治座には歌舞伎が必要である」という意見は、保存会の役職を持つ人物に多く見られ、現在加子母歌舞伎を支える人々の共

通認識であると考えられる。また、明治座にホームグラウンドのような親しさを感じたり、先人たちの守ってきた場所として強く意識したりと、「明治座には独特の良さがある」という意見が多かった。

5.4 **小結** 調査結果から、加子母歌舞伎関係者を【人に依存する場合】【歌舞伎に依存する場合】【明治座に依存する場合】の3類型に分類した。(図3)

【人に依存する場合】身近に歌舞伎関係者がおり、その人物に影響される形で歌舞伎をはじめた。のちに芝居に熱が入るか、もしくはやめる理由がないため毎年続けている。その結果、明治座をホームグラウンドと認識するようになった。



図3 歌舞伎関係者の3類型

【歌舞伎に依存する場合】歌舞伎自体に魅力を感じている。大勢の人前で演じることが重要なため、舞台によって心持ちは変わらない。該当者はかつての青年団演劇から熱が移った場合が多かった。

【明治座に依存する場合】明治座を先代が残した財産として強く意識している。「加子母の人が演じる歌舞伎と芝居小屋である明治座は、切っても切り離せない」という認識が根底にあった。歌舞伎に対して責任ある立場の人物が主に回答した。

6. 結論

歌舞伎復活以前は、青年団活動や映画上映が明治座の活用コンテンツを担っていた。しかし、歌舞伎保存会が立ち上がったから、「明治座は芝居小屋なので歌舞伎が必要である」という共通認識が立ち上がり、これが明治座の常時開館や改修工事にもつながったと考えられる。しかし、実際は歌舞伎への関心が薄い地域住民も多くいる。今後は、この調査によって明らかになった歌舞伎上演の実態やノウハウを地域の内外に周知させることによって、より広い範囲で共通認識を育てていくことが、明治座と歌舞伎を継承していく動機を生み、ひいてはそれが地域の活性化に結びつくことを確認された。

【註】

- 1: 守谷毅『村芝居—近世文化史の裾野から』(平凡社, 1988) 122.
- 2: 小栗克介(編)『美濃の地歌舞伎』(岐阜新聞社, 1999) 12.
- 3: 加子母の生活圏は、小郷・小和知・二渡・番田・中切・上桑原・中桑原・下桑原・万賀・角領の10区に分かれる。下の5部落は合わせて下半郷と呼ばれている。
- 4: 美濃歌舞伎博物館は、舞台部分に明智町の常盤座を、客席部分に下呂町の相生座を移築復元した芝居小屋を持つ、博物館施設である。
- 5: 昭和中期ごろ、各務原を中心に芝居の指導にあたっていた大谷友之助・広右衛門の兄弟がつくった、大谷興行という組織を指す。
- 6: 「森の交流大使」岐阜県が1995～1999年まで実施した。2年の任期で都会の若い女性を募り、山村生活を体験させる。「山村芸術工房」岐阜県が平成9～11年度に地元の間伐材を使って4棟の工房を建設し、芸術家を入居させた。